2016 8/9
No.2024
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

日本三大船祭りの一つで、国の重要無形民俗文化財に指定されている「貴船まつり」が７月27、28の両日、真鶴町の真鶴港周辺で行われ、天候不順で昨年行われなかった海上渡御が２年ぶりに実施された。

神奈川新聞社

政経かながわ

2016 8/9 No.2024

contents

視点・点描 3
生え抜き頭取だからこそ

講演録 4
失敗のすすめ～苦しい時こそ組織は伸びる～
ノジマ取締役兼代表執行役社長　野島　廣司

スポーツ 8
スポーツ人口の拡大に意欲
鈴木長官、地域・経済活性化に

国　際 10
危うい沖ノ鳥島ＥＥＺの正当性
南シナ海紛争と中国外交

国　際 12
“エルドアン革命”で敵対派一掃
権力闘争の末のクーデター未遂

企業最前線 14
効率化迫られる物流業界
異業種による中継輸送も

くらし2016 16
褥瘡に気を付けよう

広告珍談 18
広告はたのしい㉑
サケ、飲むな！

NNAアジア経済リポート 19

事務局だより

◇8月定例講演会
2016年8月25日（木）
午後1時30分～3時
横浜情報文化センター6階
「情文ホール」
講師は新潟産業大学経済学部
准教授の蓮池薫氏
演題は「夢と絆～拉致が奪い
去ったもの」

◇9月定例講演会
2016年9月14日（水）
午後1時30分～3時
ホテルモントレ横浜3階
「ビクトリア」
講師は快眠セラピスト・睡眠
環境プランナーの三橋美穂氏
演題は「脳が若返る快眠の技
術～ぐっすり眠れる人は認知
症にならない」

視点点描

生え抜き頭取だからこそ

マイナス金利導入、英国の欧州連合（EU）離脱決定と、企業経営やビジネスにインパクトのある話題が相次いだ今年の上半期。ここ神奈川においては、一つの人事に耳目が集まった。県内企業のメーンバンクのシェアで断トツの2割超を誇るなど地域経済に強い影響力を持つ横浜銀行で、初めて生え抜きの頭取が誕生したからだ。

1920年創立の横浜銀の初代頭取は三渓園を残した原富太郎で2代目は創業時の副頭取。3、4代目を日本銀行から迎え、1949年以降は8人に上る大蔵省（現財務省）出身者が頭取を務めた。

今年6月、生え抜きとして初めて、川村健一氏が頭取に就任した。背景にあるのは東日本銀行との経営統合。寺澤辰麿前頭取が持ち株会社の社長に専念し、持ち株会社と横浜銀の最高責任者を分離する形を取った。

1世紀近い社史の中で初めて誕生したプロパー頭取に対し、注目度は高い。行内からは「社の実情を把握しており、行内は歓迎ムードが多い」との声が上がり、OBの1人は「その銀行で育った身近な人が頭取になった方がいいとの思いを抱いた取引先はあったと思う」と指摘。実際、外部からも「地元金融機関のトップにプロパーが上がることは地元企業の立場からも誇らしい」と期待が寄せられている。

一方、東日本銀との経営統合により、横浜銀がどこに向かうのか、気をもむ向きもある。川村氏は「横浜銀行は未来永劫、神奈川の銀行で変わりはない。そういう面で（持ち株会社の）社長と頭取を分けた」「従来よりも『地元に密着している』『地域でのプレゼンスが向上した』と言われるよう期待に応えていく」と意気込む。

横浜銀は川村氏の頭取就任にあたり、「横浜銀行にしか、できないことを」と銘打ったリーフレットを作った。県民は地域へのスタンスを注視するとともに、「プロパー頭取だからこそ、できることを」期待している。

（神奈川新聞社経済部長　渋谷　文彦）

横浜銀行の歴代頭取（前身含む）

氏名	在任期間	主な前歴
原　富太郎	1920年12月～35年7月	第二銀行頭取
井坂　孝	35年7月～41年12月	横浜火災海上保険社長
高安　礼三	41年12月～44年7月	日本銀行人事部長
柳沢　鉱一	44年8月～49年12月	日本銀行国庫局長
吉村　成一	49年12月～62年8月	横浜税関長
伊原　隆	62年11月～75年12月	大蔵省理財局長
吉國　二郎	75年12月～86年6月	大蔵事務次官
大倉　真隆	86年6月～90年1月	大蔵事務次官
吉國　二郎	90年1月～90年6月	※大倉氏死去に伴う再任
田中　敬	90年6月～94年6月	大蔵事務次官
平澤　貞昭	94年6月～2005年6月	大蔵事務次官
小川　是	05年6月～11年6月	大蔵事務次官
寺澤　辰麿	11年6月～16年6月	国税庁長官

広告珍談　広告はたのしい㉑

宮野　力哉

サケ、飲むな！

図をご覧あれ。これこそ、ほんとうの3行広告である。

大きい活字で「禁酒ス」と、広告主本人の「米浪安太郎」。

小さい活字は3行で、「わたしは感ずるところがあり、今日から7年間、「禁酒ス」と。どうして7年間なんだろう。だけど自分の伝えたいことは、じゅうぶん表現できている。1888（明治21）年5月に掲出された。

この一文を書いているボクはサケ、大好き。だから禁酒なんぞとんでもない。とはいっても禁酒とはなんぞや。

はるかむかし、人類がサケ作りに成功した直後から、酒害は問題になったという。いっぽうサケは気つけクスリになる、百薬の長であるとも、霊薬であるとも考えられていた。

しかし19世紀初期、アメリカとイギリスで酒害の研究が始まった。組織だって禁酒運動が起こったのは1808年、ニューヨーク州のキリスト教徒を中心に急速に拡大した。

当初、蒸留酒だけであったが、すべてのアルコール飲料の禁止になったのは36年。全米にひろがりオハイオ州に「禁酒党」が設立、全国的な政党になった。

1909年、ロンドンで国際禁酒連盟が結成され、ヨーロッパ諸国やアメリカ・メキシコ・アルゼンチン・インド・パレスチナ・チュニジア・中国。日本も参加した。明治42年のことである。

20（大正9）年、アメリカではサケの醸造も販売も禁止された。ところがあちこちで密造酒がつくられ、輸入もされ、それを販売する地下組織が張りめぐらされた。その頂点に君臨したのが、アル・カポネである（99年、ナポリに生まれ、幼いころアメリカに移住。のち大きなギャング団を組織した）。

そのころアメリカは、大統領の側近で汚職が行われるほど、政治的には腐食していた。いっぽう、ヘミングウェイやフィッツジェラルドなど文豪、ベープ・ルースやゲーリックやテンプシーなど名選手が登場し、リンドバーグは大西洋横断飛行に成功した。

日本の禁酒運動は86（明治19）年、札幌と横浜に「禁酒会」が発足した。おなじ年4月、京都の西本願寺の「大教校」（龍谷（りゅうこく）大学の前身）の教師や生徒の有志が、〝禁酒進徳〟の標語をかかげて、「反省会」を結成。機関紙『反省会雑誌』を創刊した。のちの「中央公論」である。

『反省雑誌』には、幸田露伴が《雲のいろいろ》、大町桂月が《かた袖》、高山樗牛が《わが袖の記》のほか、国木田独歩や与謝野鉄幹、正岡子規や高浜虚子などが執筆した。みなさん、サケ、飲まなかったのかな。

22（大正11）年、日本に未成年者禁酒法が成立した。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）